

浄土真宗僧侶 名倉 幹

「悪人でも救われる」のではなく、「悪人こそ救われる」。

先月、東京で法話をした際、ある方から次のようなご質問がありました。

「先日、東京国立博物館で開催中の『法然と親鸞』を見に行ったところ、歎異抄という書物の中にある、親鸞聖人が語られたという次の言葉が表示してありました。『善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をやと。』つまり、我々世間の人間は、悪人でも助かるのであるから善人が救われるのはもっともなことだと常識的に思いますのに、親鸞聖人という方は、善人でも救われるのであるから悪人が救われるのはなおさらだ、とおっしゃられたのですね。ここがどうも理解できません。悪人よりも善人が救われるのは常識というか、当たり前ではないですか。それをなぜ親鸞さんは、善人でも助かるのだ、まして悪人が助かるのはなおさらだ、というようなことをおっしゃったのか？ どうもうなずけません。」

拙僧は次のようにお話しいたしました。

「大変大事な問題をご質問くださり有難うございます。常識的に考えましたら、おっしゃいますように、悪いことばかりしているいわゆる悪人よりも、善いといわれる行いをよくできる、いわゆる善人の方が救われていくべきであります。倫理道徳からして、そうであります。しかし、ここで親鸞聖人が言われている、『善人』、『悪人』というこの言葉は、意味がもっと深いのであります。

それはどういうことかと申しますと、私はこれだけ日々よい行いを心がけている、私はこれだけの陰徳を積んでいると思っている、常識的に言うところのいわゆる善人は、自分がこれだけのよいことを行っているのだから、心がけているのであるから、人生うまくいくべきであると思いがちであります。こういう、善人根性を持っている人は、自分は善いことを行っている善人と思いついでいる方です。自分こそ、救われるに値する人間であると考えている人です。

こういう、いわゆる善人さんは、実は自分の内実に暗いのであります。自分の本性というものがまだ見えていないのであります。それが、幸いに仏の教えに出会い、ぼちぼちと聞いているうちに、段々と教えの鏡に自分の姿が照らされてきて、今までは、自分は人よりも心がけがよく、人知れず自分は善人の部類に入るなあと思っていた、その心そのものの汚さといいますか、他と比べて他人を見下し、自分を善しとする毒のような根性の持ち主であるということが段々とはっきりと知れてきて、自分の根性の汚さに気付いてくるのであります。

つまり、悪人の自覚が芽生えてくるのであります。

今まで他人様の物を盗んだこともないし、人殺しなんか勿論したこともないし、人をだましたこともそうないし、うそはついたことはあるが、そんな重いうそはついたことがない。不倫もしたこともないし、自分はやはり善人といえるな一と思っていた人が、仏の教えに照らされるようになって、ああ、自分は幸いに今までは、人殺しという行為に及んだことはないけれど、どれだけ、あいつさえいなければな一と、憎い人を心の中で殺してきたことか。また、いろんな動植物の尊い命を、何の深い感謝もなしにどしどしと平気で毎日食っているか。強盗、窃盗の罪を犯したことはないが、これくらいは皆してると、キセル乗車をしたり、会社の用度品を私用に使ったりと、こそっと盗むという行為をしてきているのではないか。不倫行為をしたことはないかもしれないが、どれだけ異性のことを淫らに想像していることであるか……。数え上げたらきりがなくらい、自分の内なる根性はなんと浅ましく、汚いものであるか。そして、そういう根性を有していながら、善人面(づら)して、あなたはいい人やね一といわれると喜んでおるのが、この私であり、我々一人ひとりの本性ではありませんか。善人面した悪人というのが、われわれの本質であると思います。

だから、親鸞という方は、『善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。』とおっしゃったのであります。つまり、自分がいわゆる善人だと思っている人は、その根性を有している限り決して救われないのでありますけれども、そういう人も仏の教えに出会い、自分の内面の根性をしっかりと見ていく眼が養われていきますと、おのずから毒のような自分の汚さ、浅ましさに気付くようになり、決して自分が善人であるなんて言えないことにおのずからなっていく、悪人の自覚を得て、往生をとげることができるのです。往生とはつまり、わが心一つ、仏様から頂いた安心を得て進んでいける身にならしていただくことです。まして、自分はどうしようもない毒のような煩惱にまみれた身であり、決して自力根性では、この雑毒(ぞうどく)心を清めることはできないと、深くうなずき頭が下がった人、自分に泣いた悪人にして初めて、その自力根性、善人根性がすたって、仏様にすべてをお任せして救われる身になるのです。

自分というものは、おのれの力で以ってしては救いようのない悪人であるという、徹底した悪人の自覚こそ、宗教における救済の要であると思います。だから悪人こそ救われるのだと、親鸞聖人はおっしゃったのであります。」

人間は善きことをしていき、悪しきことを廃していくべきであります。善きことも悪しきことも自分の業縁(ごうえん)によって、出てくるのであります。自分の善の行為によって救われるのではなく、その善ができていくという善人根性がひるがえされて、仏の救いの大海に入って救われるのであります。

(ご質問、ご感想をどうぞ下さいませ。 [mikinakura@nifty.com](mailto:mikinakura@nifty.com) まで。) 合掌